（続紙　１　）

京都大学	博士(経済学)	氏名	野口　寛樹
論文題目	ＮＰＯの成長に関わる一考察 ―存続と発展に寄与する組織ルーチンの経営学的分析―		

（論文内容の要旨）

本論文は、ＮＰＯ法人（特定非営利活動法人）を主な分析対象としながら、非営利組織経営において、組織の存続と活動の成長を支える組織ルーチンの持つ意義を指摘し、その生成・構築・発展するメカニズムを解釈主義的な組織変革論である組織ルーチン論等を援用しつつ分析した。ＮＰＯ法人は、現在、社会サービス供給の主体として期待されるが、その発展が停滞している。本論文は、非営利組織にとって、組織の存続と発展に貢献する組織活動のパターンすなわち組織ルーチンが持つ意義について網羅的に検討した。特にＮＰＯ法人は、組織ミッションが社会性を持つので、ルーチンもまた社会性を帯びる。そして、ルーチンの特性、有効性、構築過程の特徴を一定の枠組みで示し、存続に寄与する組織ルーチンの特性，構築の過程や組織活動への効果などを分析した。そして、ＮＰＯ法人のリーダーは、そうした組織ルーチンの構築と発展において、組織ミッションを体現しつつ重要な役割を果たしている。さらに、リーダーが、ＮＰＯ法人の社会的活動に参加関心を持ちながらも組織運営に関心を持たない傾向にあるボランティアや組織成員に対して、組織に継続的に貢献するという異なる動機付けを促進する場合は、組織の存続や発展に重要な影響を与える。こうした組織運営に対する継続的な貢献活動は、組織市民行動と言われる利他的行動をルーチン化したものといえる。こうした問題を次のように論じている。

第一章では、社会サービスの担い手として期待されるＮＰＯ法人の組織存続が難しい状況を問題意識として示し、組織運営の組織ルーチンが構築される過程の分析の重要性を示した。第二章では、解釈主義的な組織変革論の分析視点から，組織ルーチンの動態的な構築メカニズムに注目したフェルドマンとペントランド等の組織ルーチン論の理論に依拠しながら(Feldman and Pentland,2003）、組織の生成、発展、変動についての分析枠組を示した。特に、ＮＰＯ法人において、組織ルーチンの論理を構築する「明示的過程」が、実際の組織成員の活動の「遂行的過程」と連動しながら進む動態的なメカニズムを示した。第三章では、組織ルーチンの生成、発展および組織内での学習において、リーダーの役割や組織成員の利他的行動が大きな影響を及ぼすことを枠組として示した。

第四章では、京都府下でのＮＰＯ法人の定款のテキストマイニング分析を元に、そのミッションの社会性としての特徴を示した。第五章では、ＮＰＯ法人は、運営資金獲得において、自治体や社会団体から，運営や管理に関する組織ルーチンを評価されていることを示した。第六、七章では、ＮＰＯ法人の事例分析を行い、組織運営に関わる組織ルーチンの学習が進む過程について、①個別活動、②組織水準、③組織間水準で分析しその特性を、社会的実践への参加の中に位置づける状況学習であると特徴付け（Lave & Wenger, 1991）、そこでのリーダーの働きが重要だとした。また、ボランティア達に組織貢献に対する組織市民行動（利他的行動）をする組織ルーチンを学習させる重要性も指摘した。その際に、リーダーが、遂行的過程において与える影響が持つ学習効果を指摘し、フェルドマン等の議論を発展させた。第八章では、ＮＰＯ法人に対してアンケート調査を元にして、ＮＰＯにおける組織市民行動のあり方、効果的な学習方法、また支援的リーダーの役割の特徴について探索的な分析を行った。第九章では、本論文の意義がＮＰＯ法人の存続・発展の組織ルーチンの生成・発展に関する一定像を明らかにしたこととまとめている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

近年、ＮＰＯ法人は、社会的なサービスやイノベーションの担い手として重視されるものの、廃業の多さや成長停滞などで、組織経営の課題を抱える。本論文は、組織ルーチン理論や状況学習理論などの解釈主義的な組織変革論に関する経営学理論の新潮流を踏まえてこの経営課題を検討し、存続や発展に関わる組織能力の分析を試みている。本論文の貢献は三つある。第一に、ＮＰＯ法人を含む非営利組織に関する従来の経営学的研究は、組織統治、人的資源管理、制度、評価、資源獲得の特徴を示そうとするものであり、組織の存続や成長に関する組織能力を問うものは少ない。本論文は，これを批判して、非営利組織を継続的に運営、存続、発展する組織能力の基盤として「組織ルーチン」の役割に注目する。組織ルーチンは、組織の持つ活動パターン、知識、価値と認識の構造を指し、近年経営学においてソフトな経営資源として注目される。第二に、近年の解釈主義的な組織変革理論の発展を受けて、組織ルーチン理論や状況学習論を取り込み、組織ルーチンの構築と学習，変動の過程に関する動態的な組織過程分析を導入した点がある。本論は、その動きを受けて、従来の機能主義、規範主義的な観点での組織学習論で捉えきれなかった、組織現場での運営や存続に関わる組織ルーチンの構築、学習、変革の局面を動態的な複数事例分析を行っている。これを通じて、ＮＰＯ法人の活動の第一線において、その存続や発展に関する組織能力が構築される過程についての理解が深まった。第三に、非営利組織の活動を担うボランティアや組織成員組織などは、組織の存続や運営に関する知識や実践に関する学習については、一般に低い動機付けしか持たないが、それを促進する状況要因もあることを示そうとしている点である。本論文は、その要因として、支援的リーダーシップや、組織市民行動という利他的行動の働きが大きいことを示した。

本論文は，こうした解釈主義的で動態的で組織分析方法を導入して、存続に関する組織ルーチンの学習プロセスを明らかにした成果を持っているが、次の３つの研究上の残された課題を持っている。第一に、組織ルーチン論や状況学習論等の解釈主義的な学習理論の整理や接合に十分でない面があり、分析枠組も一定の課題を持っている。ことに、明示的な組織ルーチンの位置づけと構築過程の分析が不明確な面がある。ルーチンが、実際の活動過程で構築される「遂行的な」側面と、それが組織成員間で制度的に受容される「明示的」側面との相互作用過程についての理論的な検討がさらに必要である。第二に、リーダーの働きが、ルーチンの構築と学習を促進するのかという疑問も残る。組織の持つ知識や活動の多様性、環境からの影響と対応、状況学習での成員間の相互作用を考えると、必ずしもリーダーがルーチン化を進めるのではなく、組織内部での多様な相互作用の展開と帰結の影響を考えるべきである。第三に、本論文が事例もしくは計量分析で取り上げたＮＰＯ法人がＮＰＯの代表的な事例であるかについては，今後の補充調査研究が必要となる。本論文で取り上げたものは、補助金で運営される形態が多い。また、環境教育、まちづくりなどの特定種類が多く、そうした領域の特異性はあるかと思われる。

しかしながら、以上の課題は筆者が今後の研究によって明らかにされるべき事柄であり、それによって本論文の独創性と貴重な学問的貢献をいささかも損なうものではない。よって本論文は博士（経済学）の学位論文として十分に価値あるものと認定する。なお平成29年9月5日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。